

平成27年度 推薦・特別選抜・編入学 小論文
出題の意図と解答の傾向

問題 1

【出題の意図】

渡辺京二『未踏の野を過ぎて』（弦書房、2011年）から出題した。著者は、江戸時代がブームとなり昭和30年代の回顧が花盛りといった、この頃の「懐古」の現象について、現代文明の異常性に触れつつ、その意味を探っていく。著者の狙いは、人間の解放と福祉を目指した人間の努力がかえって最悪の事態をもたらしたのではないかという、近代以降の文明史の逆説に注意を喚起することにある。受験生はこの老齢の著者の問題提起をどう受け止めるか、若い感性に直に訴えかける問題であることから、受験生の読解力や作文力をよく試すことができると考えた。

【解答の傾向】

<設問 1>

解答例は以下の通り。

「江戸時代ブームはいまだ衰えず、また昭和30年代の回顧が花盛りである。懐旧の感情は退嬰的かつ反動的として一蹴されるのがふつうだったが、いまではそうはいかない。親殺し子殺しが続発するような今日のただならぬ世相がそこに反映している。このごろの社会と人間の変貌には、根本的に恐ろしいところがある。しかもそれは近代以来、人間の解放と福祉のために人間が追求し獲得してきた物事の集積の結果であるとすれば、われわれは最も良き意図に導かれて、最悪の結果を生み出したことになる。過去の姿がわれわれを驚かすのもそのような逆説を気づかせてくれるからである。当然視される現代の価値観を揺るがすこと、懐古の意味はそこにある」(297字)。

本文を最後まできちんと読めば、著者の主張が最後の二つの段落に集約されていることに気付くことはさほど難しくないと思うが、前半の、ケータイ、球場での盛り上がりなどの個別の事例に引きずられた答案が目立った。著者のいう懐古の意味は「当然視される現代の価値観を揺るがすこと」にあると指摘している答案でも、「価値観を揺るがす」とはどういうことかに、すなわち「根本的に恐ろしいことが、人間の解放と福祉のために人間が追求し獲得してきた物事の集積の結果であるとすれば、われわれは最も良き意図に導かれて、最悪の結果を生み出したことになる」という著者の注意喚起にまで言及している答案は多くなかった。また「このごろの社会と人間の変貌には、娑婆はいつも変わっていくものだし、その変化は多少の弊害は伴うにしても結局は福利をもたらすのだといった、これまでは通用したかもしれぬ言説を一切無効にしてしまうような、なにか根本的に怖ろしいところがある」という一文について、内容を誤読した答案が少なからずあった。

<設問2>

著者の「違和感」に同調するか、同調できないとして批判するか、様々な考えがありうるが、いずれにせよ、1) 著者の「違和感」がどのようなものをきちんと理解できているか、2) 自分の意見を述べる作文力、言い換えれば論理的な構成力や表現力はどれほどか、を基本的な採点基準とし、優れた社会的感性をうかがわせる内容のものは加点することにした。

「同調しない」とした答案に見られた傾向

著者の「違和感」を十分に理解せずに、ケータイなどの個別事例にとらわれて一方的な批判に終始している答案が目立った。例えば、人類の進歩、発展、(あるいは「進化」)を引き合いに出して「違和感」に同調しないとする意見が複数あったが、それは「違和感」がまさにその「進歩」「発展」に向けられていることを理解していない。また、ケータイ等の技術進歩を著者が否定しているかのように捉えてケータイの利便性を擁護する答案が数多く見られたが、批判としてピントがずれている。

「同調する」とした答案に見られた傾向

著者の主張を理解した上で、著者が挙げているのは別の事例(ハロウィン祭りを「コスプレ」として楽しむこと、インターネット犯罪の増加、公園で集まって黙々とゲーム機で遊ぶ子供たち、等々)を挙げて論旨を補強する答案がみられた。また「ケータイの普及とコミュニケーションの希薄化またはコミュニケーション障害」に焦点を当てた答案が目立ったが、著者の意図に即しているとは言えよう。なかには、仲間の同調圧力やケータイによるいじめやトラブルを取り上げて、ケータイに依存しきった若者のコミュニケーションのあり方に関して鋭い分析を行っているものもみられた。

著者の「違和感」の由来を論じたものもあった。慣れ親しんだ文化・社会と急速に発展する利便性との間の「ギャップ」(ショッピングモール vs. 商店街)こそがそれであるとし、「懐古」は「違和感」を埋め合わせる消極的手段だとしていたが、目を引く答案であった。このほか、かなりの字数を使って著者の主張を要約している答案や、題意とはほとんど関係なく強引にあらかじめ準備していたと思われる主張を述べ立てる答案もあったが、題意に沿って解答するのが、小論文の基本であることは言うまでもない。

問題2

【出題の意図】

問題2は生活保護に関する図表から、日本社会における生活保護の実態と高齢者の貧困を読み解く問題を出題した。生活保護制度について新聞記事等で得られた社会の状況を重ね合わせて生活保護の現状を読み解くことを目的にしている。

設問1で生活保護の実態を示すグラフを読み取ることを求め、設問2で、生活保護の特徴を高齡社会における貧困問題として記述することを期待した。

本設問は、生活保護についての踏み込んだ議論を知らなくても、図表から読み解ける範囲で記述・回答できるものとなっており、生活保護の知識そのものを問うているわけではない。

【解答の傾向】

<設問 1>

図から何が言えるかを記述することを求めた。割合・構成比と実数を混同した記述が多くみられた。2つの図を合わせて解答すべきところ、片方だけの図をもとに解答しており、図を総合的に分析する力が見られない解答もあった。

図 1-1 と図 1-2 による問では、保護率に当たって用いられる%や保護人員の目盛りの読み間違いがみられた。郡部と市部での保護人員数の推移を「地域間人口移動」と理解して記述するなど、グラフタイトルをしっかりとよんでいないのではないかと思われる回答もあった。

図 2-1 と図 2-2 による問では、被保護者世帯に関し、世帯類型と世帯人員類型と分けて提示しているにもかかわらず、その違いを明確に読み取らず、高齢世帯割合のうち一人世帯が多いという回答が多かった。また、2011 年度の一般世帯と被保護世帯との比較によりいえることに十分に留意していない解答もある。

図 3-1 と図 3-2 による問では、若年層、中年層、高齢者層について一般人口と被保護人員との比較が適切に行われており、比較的解答しやすかったと思われる。

<設問 2>

きわめて初歩的なことだと思われるが、設問の意図を理解していないと思われる解答が非常に多かった。設問は日本の生活保護の実態を示す図からその特徴を記述することを求め、その特徴を高齢社会との関係で考察するように求めているものである。しかし、「高齢社会」というキーワードにとらわれ、肝心の生活保護に関する特徴についての分析をほとんどしないまま、小論文の指導で練習したであろうと思われる定型化した論述が多くみられた。たとえば社会保障と国の財政問題、社会保障と少子高齢社会の課題、若者と雇用問題というスタイルである。そのため、あきらかに生活保護についての一般常識の範囲での知識がないために、年金と混同し、保護率を年金の受給率として記述する解答もみられた。そのため、本設問では高齢社会への政策的対応を問うていないにもかかわらず、その点の記述に字数を割き、本来の問いには応じていないという論述も多かった。

自分の経験談やニュースなどの時事問題と絡めて記述する解答もみられた。設問 2 はエッセイではなく、図表の読み取り問題としての解答ではない。

全体の傾向として、小論文対策として定型的な政策提言を盛り込む回答が多くみられた。その結果、図表そのものを読み込み、きっちりと客観的に記述する力が育っていないという印象を受けた。